

4月当初、新しい環境に緊張していた子どもたちは、コロナ禍でも先生方の様々な工夫で、園や小学校生活に慣れ、楽しく過ごす姿が見られていることでしょう。東京オリンピック・パラリンピックで選手が成果を全力で発揮する姿は、チャレンジ・諦めない心・集中力等を感じさせてくれ、目的をもって挑戦する力となり、子どもたちの今後の成長につながってほしいと思います。さて、今号では、幼稚園教諭・保育士合同研修会と幼児期運動指導（運動遊び指導）リーダー保育者養成研修会の様子を紹介します。

第1回 幼稚園教諭・保育士合同研修会
6月8日 池上会館

テーマ 「保育実践を進める上で大切な保育者の役割」
— 対話的關係のもとで対話的主体を育てる保育カリキュラム —

講師：東京家政大学 子ども学部子ども支援学科 教授 加藤繁美先生

コロナの中で今までできなかったことが議論されている。小・中学校でも同じです。例えば行事について見直してみましよう。行動計画を事務的に作っていなかっただろうか。大人は子どもの声を聞き取らなければならない。子どもは思いを表現する権利があるからです。『対話的保育カリキュラム』—保育者・子の関係の下で対話的保育をしていくこと。先生が一斉に子どもを動かしていく保育者主導の関係から子ども主導の保育へ変えていく。子どもの能動性を大切に、保育計画を子どもと共につくっていく。子どものアイデアが形になっていくということ。



事例 <雑木林プロジェクト(町田市の幼稚園)>

子どもたちから秘密基地ごっこがしたいと声が上がります。自分たちで作りたいと近くの雑木林に行くと、ベンチ、滑り台、足湯、トロッコを作って乗りたい等、次々と意見が出る。保育士は「難しそうだね。大丈夫？」と、子どもたちに寄り添う。(中略) 四角の囲いとビニールシートで足湯を作る。子どもたちは試行錯誤して泥水に浸かりながら、すのこを敷き水が汚れないように考えた。その後、小さいクラスの子どもたちを招待したいということから「遊園地」に発展する。チケットを作り役割を決めて遊ぶことができ、子どもたち自身が十分満足できた活動になった。

☆プロジェクト型実践(子どもたちの声がつくっていく子ども参画型の実践)で学びは深くなる

※プロフェッショナルな保育者の役割とは—5歳までの間に子どもの声を丁寧に聞き、自我(自己主張)と第二の自我(社会的知性-社会のルールを守って行動する力)の間で葛藤する子どもの姿を発達の姿と受け止める。受け止めていけない部分は「〇〇したかったんだね」と応じ、「でもね、貸してって言おうか」と、社会のルールを心地よく身に付けられるように思いを受け止めて切り返すことが大事。

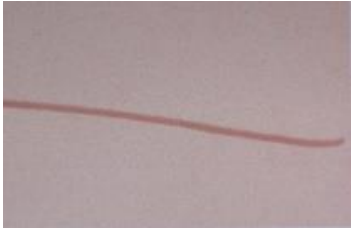
※保育実践記録を書く—記録を理論で分析し子どものことを園で共有する。保育者の専門性について、第一に必要な力は共感力。叱りつけは駄目。「〇〇したいんだな」と子どもの思いを受け止める。保育者の経験から体が動いて応じる直感的応答力を高め、ひらめき力が出てくるように、とにかく体験する。もっと面白くしたいと考える子どもの願いと面白く発展させようとする保育者のひらめきがうまく合うと、保育者と子どもの関係は対話的になる。保育者の対話能力が実践の質の差となるので、対話能力を確かなものとするためにも書く必要がある。実践記録を書き続けていくことで、子どもを見つめる眼差しが柔らかくなり、子どもの心の動きに「共感的態度」で臨むことが可能になり、子どもを主体とする保育実践をつくり出せるようになっていく。プロの保育者は、共感力・査察力・分析力・ひらめき力・再現力をもつようにしていきましょう。

<参加者の感想より>

- ・2歳児の今がとても大切ということが分かり、人との関わり方を見直したい。伝え合うことの大切さを実践していきたい。
- ・子ども主体の本来の受け止め方が分かった。話す以上に何を考えているか、聞いてあげる対話というものの大切さがよく分かった。「受け止める、共感する」ということが、自分の中にしっかり落ちた。
- ・子どもの主体性を尊重する意味を考えさせられ、対話の大切さを学べた。子どもたちの声を聞き、子どもたちと一緒に解決方法を考えていきたい。

武蔵野大学 教育学部幼児教育学科 学科長 教授 生井亮司先生をお迎えして、前半は講義、後半は実習を御指導していただきました。

【講義】 <見ることは想像的？・・・ものを見るということを考えてみる>



この絵（線）をすごいねと思うかどうかということが、感性を育てていく上で大事なのではないかな。この絵を最後には「いいね」と額に入れてくれるような人になってほしい。造形＝作品ではない。過程が大事。子どもたちは、知らないもの、いろいろなものを面白がって見る。子どもに合わせて面白いと言っても、本当に面白いと思わないと見抜かれてしまう。

(3歳児：スピード)

○子どもの作品を「見る」→ 作品から聞き取ろうとする、あるいは読む

①近づいて見る。②描いた順番をたどる。③その子の理由を考える。「できたね」を共有・共感することが大事。そのために過程を見る。子どもと一緒に楽しむ感覚で「全体」よりも「部分」を見ながら、どんな工夫や苦勞をしたかなど、おしゃべりしながら細かく見ていく。人は感動すると伝えたいので子どもが感動したことを伝えてきたら、この人は何と言ってくれるだろうと期待していることを大事にしてほしい。

【実習】 <リンゴを描いてみようー参加者が持参したリンゴを見て、輪郭線を描かないで描くー>

リンゴは特徴を知っているのに記号的にはすぐ描けるが、表現として描いていき面白がるのが大事。リンゴの意味や概念をはずしていく。丸いですか？よく見ると五角形している？赤いというけれど単純ではない。リンゴの中には何色あるか子どもに聞いてみるとよい。黄、緑、ピンクもある。赤の中にもいろいろな色があるのが見えてくる。丸いけれど丸くない、輪郭線はどこにある？線は見えない。どうしたら見えるようになるか・・・

①黄色の点を描き広げていき、本物の大きさに近づけていく。黄色いリンゴになりました。



⇒



⇒

②赤い所を探して、赤で色付けしていく。



⇒

③ピンクを塗り指で擦ると、混ざった色ができる。



④粒や点々は爪楊枝や竹串でスクラッチする。



⇒

⑤影を描く。最後にサインや日付を書くと恰好良く見えます。



⇒

⑥ベビーパウダーをティッシュに付けてリンゴを擦る。つるつる艶々になる。



☞ こうすると描けますではなく、どうしたらこう見えるようになるかを考えることが大事。保育者自身がリンゴを見て面白いな、きれいだなという感覚を身に付けていく。リンゴに限らず、ペットボトルを見てもキラキラしてきれいだと思う気持ち。自分自身が素直に思える、楽しめるようになっていくと、自然と子どもたちに伝わっていきます。